# 仏教の経済学

仏暦２５５８年７月　連研資料

## １、雪下ろしの経済学

『　町並や　雪とかすにも　銭がいる　』　　小林一茶

雪下ろしをしながら考えた。
「雪下ろしは一銭の得にもならない」と長年そう思ってきた。
雪下ろしをするときに、これが食べものだったら…、金塊だったら…とつい思ってしまう。
ところが身体だけ疲れて、降ろした雪や運んだ雪は、やがて融けてしまい何も残らない。
では、雪下ろしは何も生み出さないのか。

いや、雪はスキー場に積もり、客をよんで経済効果をもたらす。
また、除雪をする建設会社へ金をもたらす。また、雪を使って、食品を保存したり、春待ち人参のように雪の下で糖度を増したり…　そういう積極的な雪の利用もされている。

でも、雪下ろしは違うとつい思ってしまう。では、雪下ろしが何も残さないなら、他の仕事は何を残しているのだろう。例えば、百姓で野菜をつくるとすると、労働は野菜に変化する。そして、その野菜は、お腹の中に入ってやがては消えていく。
じゃあ、雪下ろしと野菜づくりはどこが違うんだろうか。
どうやら違いはないようだ。
何か残るかどうかではなく、人が生きてゆくためにはどちらも必要なのだ。

例えば、雪下ろしができないおばあさんがいたとしよう。雪下ろしはしなくてはならない。
そこで誰かに雪下ろしをしてもらう代わりに、自分のつくった野菜を渡す。
雪を下ろすことと野菜が交換され、お互いに生きていくことができる。
そして、これは自然にお金を使った交換に代わる。

では、そのお金の交換とは何か。
お金は回りまわってまた野菜づくりのおばあさんの手元に来る。
とすると、お金の交換によっていったい何が変わったのだろうか。
まず、それぞれの生きていくために必要なモノやコトが交換されている。
雪下ろしをしてもらったこと、食べるための野菜、薬や、農機具などに。
それはモノやコトが移動しただけなのだろうか。

この変化は、単なるモノの移動だけではない。雪下ろしで考えるとよくわかる。雪下ろしは単なる雪の移動ではない。
「雪下ろし」ということの意味を伝えたことにもなっている。

「これで大丈夫だからね」と。それは、メッセージであり、意味を伝えたことであり、それはコミュニケーションそのものといっても良い。
よく考えてみれば、モノの交換においても、そのモノの意味（メッセージ）が大事だ。
その人にとって、そのモノに意味があるからこそ、交換が必要となっている。
つまり、交換することは新たな意味を誕生させることになっている。結局は、「意味＝メッセージの交換」、つまり「コミュニケーションの成立」ということになる。

雪下ろしを自分でやっていてはわからないことがたくさんあった。雪下ろしも教育の仕事も同じだったんだ。これは安冨歩さんの「貨幣論」の応用である。

## ２、宗教を市場化する

もちろん否定しようとしているのだけど、けっこう飛びつく人がいるかもしれない。
「朝日新聞グローブ」で、「うつ」になった英国人が語っていた。
『それまで、病気で仕事を休んだこともなく自分が「うつ」になるなんて考えたこともなかった。ところが、すこしずつその症状があらわれてくる。最初は些細なことが不安になり、やがて簡単な決断も悩み過ぎてできなくなる。切羽詰まって、悩みに悩んで病院に行こうと休みを取る連絡をしたら、弱い人間と見なされてしまうのではないか、そうなったら自分のキャリアは終わりだと何時間も悔やむ。

この人が、立ち直ったきっかけは同じ会社の人から声をかけてもらったから。
「一緒に食事をしないか」という声掛けのおかげで、少しずつ会社に復帰し、やがて立ち直ることができた。そして、彼は病気から回復して、自分はより強い人間になれたと思う。

「自分はもう終わりかと思ったがそうではなかった。心を病んだ人を切り捨てて、新しい人を雇えば**コスト**がかかる。休んだ人を支えるのは**ビジネスとしても素晴らしい判断だ**。」』

彼は、自分を追い込んだものの正体を見つけてはいない。
それどころか、自分自身の病気をケア市場に取り込もうとしている。
企業が社員のうつに取り組むのをコストで見るという見方こそが、彼自身を追い込んだと思うのだが。でも、たくましいと言えばたくましい。
これを「強い人間」というのなら、私は弱い人間でいる方が幸せだと感じる。
新自由主義的統治（主体化＝服従化）は強力だ。

新自由主義は、本来市場化できないところにも常に新しい市場を開拓しようとする。
そして、商品化して利益が上がらないものは簡単にきり捨てる。市場化と競争化が「うつ」を生み出し、その「うつ」をさらに市場化するという笑い話なのだ。
こういった私たちの苦しみを市場化し、そのケア市場に宗教も参加できる。
現代人の苦しみをケアという視点から「救いという宗教」として。
宗教はケアを商品にしてはいけないが、ケアはすでに商品になっているかもしれない。

宗教のケアは洗脳が心配だけど、こちらは科学的なので安心とか・・・。

しかし、そんな中で、商品ではないケアをしようとしている人たちがちゃんといる。
全てを商品ととらえてしまう市場主義に染まらない人たちがちゃんといる。

## ３、仏教の経済論

「お布施に見合うようにお経をたくさんあげてほしい。」
「千円出すから千円の価値があるものをよこせ。」

こんな話を聞くと、つい「法施の対価がお布施」と考えてしまう。
危ない危ない、危うく魔道に陥る所だった。
「グローバル資本主義・新自由主義」は全てを商品に置き換える。
商品に置き換えるものはお金でねうちを量ることができる。
これらはすべて仏教でいう私たちの心で起こる煩悩である。

「感動をあるがとう」「勇気をもらった」
なんと、気持ちをもモノ化し、商品のように売り買いできるようになった。
こうやって、グローバル資本主義は、音楽などの芸術、教育、医療、介護までも介入してきている。悲しいことだ。

そして、私たちは、そういう商品化されたものを消費するだけの人になってしまっている。
（これを主体化＝服従化＝煩悩という）
でも、この世界に生きているかぎり、お金は無くてはならないし、
経済的な効率を考えないと破綻してしまうよ、という声が聞こえてくる。
経済的な効率の追求とは、「より少ない代価で価値のある商品を手に入れようとするのが賢い生き方だ」と考えることをいう。

ところがこの考え方は、まずいことを生み出してしまうことがある。
例えば、学力も商品とすると、その商品をより少ない代価で手に入れようとする。
つまり、できるだけ少ない時間で、できるだけ効率的に学力を手に入れようとする。
その結果得る学力は貧困なものとなることは簡単に予想できる。

つまり、お金による交換はとても便利だが、その交換によって単なる交換の道具だったお金が最もねうちのあるものとなり、さらにお金によってモノ（商品）の価値を計ることが当たり前になり、やがて、労働を商品化し、全てのモノを商品に変えてしまう。この全てのモノ・コトを商品化（＝貨幣）してしまう所が魔道なのだ。

では、仏教ではそういう経済的なことはどうしていたのか。
例えば、坊さんはお布施をいただいて生活しているから、お布施＝給料なのだろうか？。

お布施は、お経や法話（＝労働）の対価としていただくものなのだろうか。

たぶんそう考えている人が多いと思う。実は、お布施というのは六波羅蜜の修行（布施・忍辱・精進・禅定・持戒・智慧）のひとつなのだ。する人の修行なのだ。
そして、お経や法話も法施という行（ぎょう）なのだ。

仏教では快楽や苦に執着してはいけないと教える。それは執着が心をゆがめるからだ。
モノやコトに執着することによって、判断が狂い、無いものをあると見てしまう。
それを無くすトレーニングとして布施がある。
モノやコトを手離してゆく（捨てる）こと、これを布施＝贈与という。

布施には大きく三つある。財施（持ち物を与える。いわゆるお布施はこれ)、法施（より良い生き方を語る)、無畏施（相手に畏れを与えない）

この無畏施には、和顔施、愛語施、慈眼施、捨身施、心施、床座施、房舎施と７つある。
無財の七施といって、お金がなくてもできる布施である。
つまり、お経・法話の法施も財施も、どちらもそれぞれの行なのである。
決して労働とそれに対する給与ではない。

このことについて次のサイトがとても面白かった。
『贈与とお布施とグローバル資本主義』内田樹×釈徹宗×後藤正文 -The Future Times

真宗には「御恩」という考え方がある。
この考え方は、どこか恩着せがましい気がして、わかりにくいものだったが、
内田さんの贈与論を知って、そういうことだったのかと納得した。
恩はわかりにくいが、贈与だとわかり易くなるのは、
私自身が経済的人間になってきているからなのかもしれない。

≪贈与論≫
自分自身は何もしていないのに先行者から贈り物をしてもらった。
受け取った方は、負債感があるから次のひとにパスをする。教育はまさにこれで、贈与をされていた。贈与されたものは商品ではないので、次の人に渡すしかない。
親から子への贈与や念仏の相続もこういったものだろう。
この身体も言葉も土地も家も家族も膨大な仏典も、今までの受けてきた様々な行為や言葉も全て贈与であった。いや預かりものであった。
この贈与を受け取り豊かな人生を送ったからには次の人に渡すしかない。

「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ、
　連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す。
　無辺の生死海を尽さんがためのゆゑなり」　　教行信証　後序